

1. ビフォアコロナ視点とアフターコロナ視点で事象を吟味し未来予想の角度を高める
2. ワークショップで人が交流する創造的なパワーに注目。デザインはチームワークで行う
3. 基本的スタンスは楽観主義。「こうありたい」暮らしの実現に向け社会課題を解決する

デザイン・ワークショップ・メディアを通し 次の暮らしをデザインする。未来予想図を描き、変化のスピードとその要因を見極める

トランログ株式会社
代表取締役

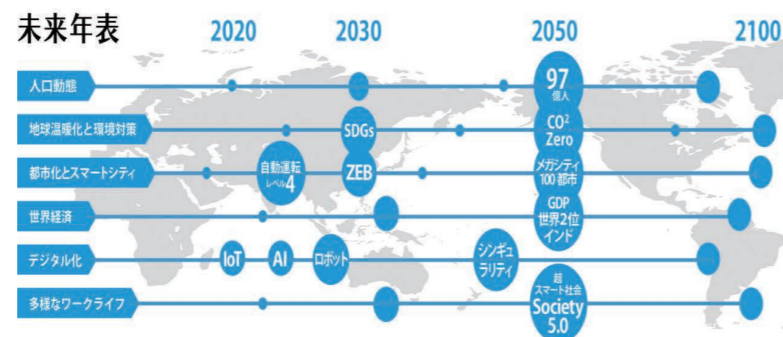
杉田基博氏

取締役

友寄和子氏

東京事務所代表

井上志津江氏



トランログ (Tranlogue) とは、英語の trans と logue を組み合わせた造語。言葉を通して (through language) 言葉を超えて (beyond language)、期待以上の成果をデザインすることを表明している。「アフターコロナ/ウクライナ危機後の新・未来年表」を公開。HPでアンケートに答えると、無料でダウンロードができる。https://www.tranlogue.jp/?p=3943

未来を見据え、安心できる環境と豊かな暮らし方を提案する

トランログは、デザイン (商品企画や事業企画、コミュニケーションデザイン) とワークショップ (実践的なデザイン教育)、メディア活動 (出版のための記事作成) を柱に、主には食と住環境ビジネスの構築に向けてマーケティングリサーチ、国内外における取材や調査、企画開発、プロダクトデザイン、コミュニケーションデザイン、空間デザイン、展示会への出展支援、販促ツールの制作などを手がけている。主なクライアントは、行政や公共機関・施設、電機設備メーカー、素材メーカー、食品メーカーなど幅広い。



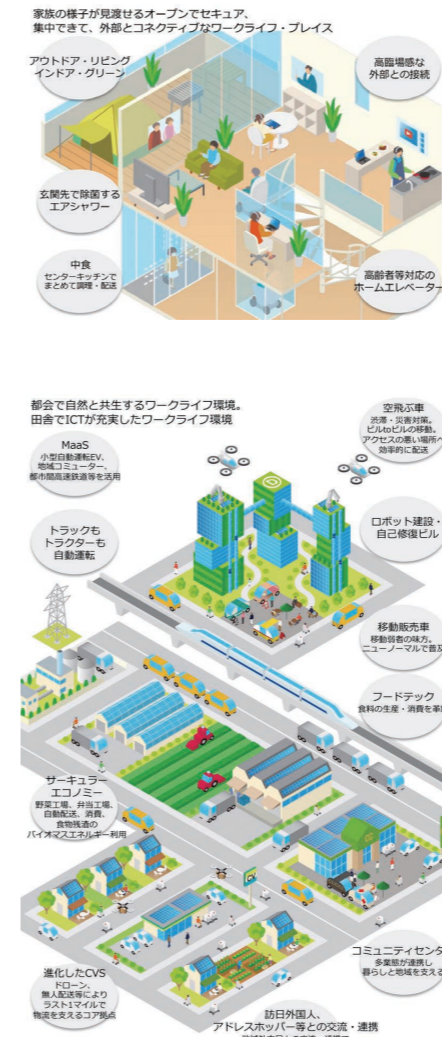
すぎた・もとひろ
京都工芸繊維大学意匠工芸学科 (現デザイン・建築学課程) 卒業。トランログ株式会社ならびに一般社団法人 里山ソーシャルデザイン代表



ともより・かずこ
トランログ (有) 取締役ならびに (一社) 里山ソーシャルデザイン事務局長



いのうえ・しづえ
フェリス学院大学 文学部英文学科卒業 (現文学部英語英米文学科)。トランログ (有) 東京事務所代表

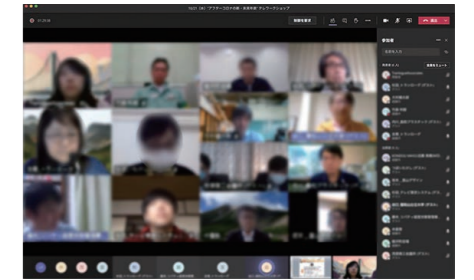


目的別未来年表も作成。上記は『イラスト版・ワークライフ未来年表』の一部。※無断複製・無断使用禁止

また政策や法律などの改正に伴い技術・市場開発などが必要な先の長いソーシャルデザインに向けた勉強会を開催。今は安全保障の視点で見た「エネルギーの未来」「食と農の未来」をテーマにそのビジネス機会と障壁の把握にも努めている。一方で、都市と農村の交流を通じ、双方の健康に貢献することをミッションとして、災害や景気に左右されない暮らしと社会の実現の一端を担えるよう、2019年に「一般社団法人 里山ソーシャルデザイン」設立。「みんなでつくって、みんなで食べる」をテーマに米づくりワークショップを実施し、人が助け合いながら自分たちが食べる米を自らつくる技と楽しみを伝承する中で人と人とのつながりといった体験をデザイン。また里山体験を通して農村民泊の普及にも取り組んでいる。これらの活動が注目され、昨今は、千葉県内外の小中高生を対象に、SDGsに関する授業の依頼が増えている。

上/設計・インテリアデザインを手がけたゲストハウス。地元の木材、自然エネルギー、温度差換気を利用した高断熱な設計

下/商品企画・デザイン・販売を手がける面発光LEDインテリア照明「AirLUCÉ (エアルーチェ) 」



安全保障の視点で見た「エネルギーと未来」「食と農の未来」をテーマに勉強会を実施し、その機会と障壁を把握する活動を行っている。参加者の業種は、資源エネルギー庁や農林水産省、自治体、通信、エネルギー、石油化学、プラスチック成型加工、電機、交通インフラなど多岐にわたる

未来年表をガイドラインに角度高く次なる暮らしをデザインする

いずれの仕事も提供するの「次の暮らしをデザインする」こと。次の暮らしを捉えるためには未来を予想する必要があり、そのたたき台となる未来年表を2008年から更新し続けている。「地球環境・国内外の政策」「経済・産業」「社会」「技術」に着目し、それぞれの予測事項や、新たなトレンド動向を一覧に整理している。コロナ以降は、ビフォアコロナ (B.C.) とアフタコロナ&ウクライナ危機後 (A.C. / withコロナ含む) 欄を設け、過去に言われていた未来観と現在の未来観とを比較。事象の経緯などを捉えながら予測の角度を高めている。トランログが考えるデザイン・デザイン思考とは、色や形に係わる狭い意味でのスタイリングではない。未来年表やシナリオ、イラスト、動画などの未来予想図をたたき台として描き、クライアントやパートナー、

時にはユーザーを含めたチームとして、未来予想図を実現可能な姿にブラッシュアップしていくスキルと考えている。

戦略視点を持ち、偏りのない「人」中心の発想で未来を描く

未来を読み解く上で重要視している点を挙げるとすれば、まずは「注目すべき変化の芽・望まれているビジョン、変化のスピードをキャッチすること」と「基礎情報を把握すること」。例えば、解決しなければならない課題 (パリ協定やSDGsなど)、社会不安の要因、リスク要因の把握はもちろん、人口動態や経済指標などマクロデータや技術など基礎的な動向、成長産業と衰退産業、伝統化する産業の区別・見極めも必須。それらを背景としたときの暮らしが変化するスピード感、加速・遅延する要因も同時に押さえておく必要がある。現時点でイメージできることはほぼ実現可能であるため、その実現のタイミングを図る感覚を養うことが未来予想には重要になる。

ただ、次代の暮らしを描くアイデア段階においては、技術進歩に代表されるシーズ中心の発想に陥らないこと、少数意見にも注目するなど、人中心の発想を心がけている。「未来はこうありたい」を叶えるための課題解決を念頭に置くなど、楽観主義を基本的なスタンスにしている。

「短期的・中長期的戦略視点を持つこと」も重要で、前者はすばやく結果を出すことが求められる商品・事業化に向けての視点であり、後者は広く社会に受け入れられ、長く評価される商品・事業化に向けての視点になる。また中長期戦略を考える際、より大胆な仮説を描き新規事業開発につなげるため、社会を変えたいと切望するイノベーター（法改正など、政策提言を行う人物など）や、ある意味法的なことはこの次にしてやりたいことを優先するような社会から一目置かれるエクストリームな人物に注目しておくべきだと考えている。

2025年のビジネスは 社会貢献が前提条件に

2025年に向けて、ライフスタイル視点では、休暇も複業も増えることを背景にデジ

タルノマドの増加とシェアによる女性の就労が拡大する見込みだ。またメタバース時間の増加とリアルコミュニティの充実など双方ともが濃厚になっていくと予測される。レジャー領域でもシェアやサブスクが伸展。デジタル化推進で子どもや高齢者の安心・安全の確保が可能になる。また、美容や健康関連サービス、高級レストランなどの移動販売車の充実で、自宅近くで非日常体験を味わえる時代になるのではないかと。学び領域では、先行き不透明な時代に定年延長により幅広い世代でリスクリングが伸展。義務教育では生き抜く力を育むためのアクティブラーニングが重視されるとともに、教育のデジタル化でカスタム・効果的な学びに進化すると期待される。環境視点では、気候変動に対応するため食習慣に変化が生じるだけでなくAIやロボットによる防災や食料生産が拡大。製品やパッケージなどのバイオ素材化も加速する。デザイン視点で見ると、ビッグデータでAIが製品をデザインする時代になっていると予測される。高速通信とVRの進歩でデザインをリアルとバーチャルのハイブリッドで設計することが可能になってい

るだろう。その他、「食と農」にフォーカスすると、食の輸出競争力が維持され国内農業の成長が見込まれるとともに、「デジタル田園都市国家構想」により地方の「転職なき移住」が増加し、半農半Xな人々が活躍しているのではないだろうか。また日本の観光地魅力度世界1位を生かし、「清潔・安全」をキーワードにリベンジインバウンドが拡大。食の安全保障や健康意識の拡大でフードテックが伸長と思われる。

これからの時代には社会貢献がビジネスの前提条件になるため、営利・非営利双方から商品・事業化の可能性を探っていくことが求められる。「シェアリングエコノミー＝シェアライフ」「サーキュラーエコノミー＝サーキュラライフ」などはソーシャル活動の典型でもあり、クライアント企業への提案でも考慮している。

いずれにしても、現在の法制度の中でできるのか否か、法改正の動きが見られるとしたらそのゲームチェンジがチャンスになり得るのか否かなど戦略視点を持ちながら、最終的なビジネスモデルを構築する必要がある。

2009年より房総の工房前の田んぼで米づくりワークショップを主催、2019年には「一般社団法人 里山ソーシャルデザイン」を設立し、米づくり体験を充実させている。東京都文京区のこども宅食事業にお米を寄付するための作業なども担う。また、里山ソーシャルデザインは、睦沢町農泊推進協議会の中核団体として、ゲストハウスやキャンプサイトなどを通して農村民泊の普及にも取り組んでいる

